

私達の病院

東京に住んでいて、都立病院の前を通つても一寸私達の病院という感じはおこらない。かつて地方の町に住んでいたときも、市立病院があつたが、やはり私達の病院という感じはおこらなかつた、まして私立病院ともなれば、丁度そこらにある店と同様にしか感じを受けない。ところが医院になると、かゝりつけの先生の家は、親類のやうなつながりを覚えるものである。

府縣立とか市立の病院と違つて、職域病院になれば、その感じは一變するらしい、工場立病院、会社立病院になれば、その社員及びその家族にとつて非常に近いものになるらしい。病人にとつては病院の職員は同僚であり、職員も同僚並に同僚の家族として取り扱ひもするであらう、又診療費も大抵心配のない程度であるしするからであらう、病院を皆して支持することが多い。

病氣してまづ医療をうけるように出発するところは多く家庭である。工場、会社等を考える場合、大多数は町の中に又周辺の農村などに豆を散したように、各々家庭生活を営む。従つて病氣したとき医療をうけるためには、その距離が近いことが必要なことになる。病院は地域性ということが、その存立理由の大きなことである。若し入院しなければならぬ場合など、入院するための病人の運搬や、お見舞やら考へただけでも近いに越したことはない。

ところが地域性を重んじた、府縣立病院とか市立病院は、なんだか私達の病院という感じがしなくて、職域病院があるところでは、遠い道も意とせず、そこにかけつける。將來病院問題は漸次解決せられてくると思うけれども、地域性に設立せられた病院が職域病院と同様に私達の病院になることが、工夫のいることであらう。病院の周囲に住む人達がこぞつて支持する病院になれば、職域病院の必要ではなくなるであらう。(E・H)